

2009年度第15回FDフォーラム

学生の学びを支える—つなぐFDの展開—

教育開発支援機構 FD推進センター長
川上 忠重

財団法人大学コンソーシアム京都主催、文部科学省・京都府・京都市後援の第15回FDフォーラム「学生の学びを支える—つなぐFDの展開—」に参加する機会をいただいた。ここで、その概要を紹介する。本フォーラムは、1995年から毎年開催されている、全国規模のFDフォーラムである。

今回のフォーラムは、高等教育機関では、「実質的なFD」の実現が求められているが、教育や学びは、そこに参加する者の双方向的なやりとりの中で創り上げられていくものであるとの観点から、学生・職員・教員・大学といったいくつかの相における「つなぐ」試みの議論(シンポジウム:初日3月6日(土))とテーマ別ミニシンポジウムと分科会に分かれた個別テーマ参加型議論(二日目:3月7日(日))の二部構成となっている。今回の参加人数は延べ1000名程度の参加者数であった。

まず、シンポジウムであるが、1)学生をつなぐFD(橋本勝氏 岡山大学教育開発センター教授)、2)職員をつなぐFD(神保啓子氏 名城大学大学教育開発センター主査)、3)教員をつなぐFD(圓月勝博氏 同志社大学教育支援機構長・文学部教授)、4)大学をつなぐFD(小田隆治氏 山形大学高等教育研究企画センター教授)の話題提供をいただき、その後、質疑応答形式で「つなぐ」をテーマに活発な議論が行われた。コーディネーターは、大塚雄作教授(京都大学 高等教育研究開発推進センター)である。

「学生をつなぐ」FDでは、岡山大学の学生・教職員教育改善委員会の活動内容を例に、組織でつなぐ観点からのお話や橋本メソッド(チーム制による本格討論型授業)と呼ばれる、コミュニケーション能力の育成や主体的な学びを通じて深まる内容理解と学習意欲の自然な向上を目的とした授業でつなぐFD、心でつなぐFDとして、学生・教職員にとって欲しい3つの意識(学生:生徒から学生へ、教員:大学らしさの追及)が紹介された。

「職員をつなぐ」FDでは、名城大学を事例とし、大学教育について語る場づくりについて、授業参観することにより、専任教員・非常勤講師・職員で授業について語り合う授業検討会や職員が授業を取材し、レポートをフィ

ードバック・公開することによる授業改善方法や、職員参加型FDのための人材育成について、職員の観点からのFDの取組みが紹介された。

「教員をつなぐ」FDでは、94%の大学教員が、「自分は同僚よりも優れていると感じている(出典は不明との紹介)」の大学教員の意識問題から始まり、伝統的な教員像と大学教員文化の現状と理想像を、①研究業績②教育業績③社会貢献④管理運営面からの話題提供と新任教員研修の方策についての考え方が紹介された。

「大学をつなぐ」FDでは、大学間の「共同」によって一定の教育の質の「標準性」を維持し、国際通用性を確保するための取組みとして、山形大学の「FDネットワーク“つばさ”」の構想や事業紹介から、大規模な大学間ネットワークを利用した、教育資源の共有やFDのさらなる発展への取組みが紹介された。

その後、質疑応答となり、他大学でのFDの取組みが自校のFDに本当に活用できるか否か、FDを実施したことによる効果をいかに評価するか、学生・職員・教員・大学全体のコミュニティー創りとは?等々、実際にFDをご担当されている教員・職員の方からの貴重な意見を聞くことができたことは非常に重要であった。

二日目は、第2分科会「講義の復権—理論・実践からの分析—」に参加し、講義が満たすべき条件、なぜ講義授業が必要か?(その重要性)、プレゼンテーション型教授法の効果と課題について等、あらためて「講義」を見直すことにより、「講義の質向上」についての話題提供、議論が展開された。各大学において学生参加型双方向授業やアクティブラーニング等々が数多く現在では紹介されているが、これらも「授業改善」の手法の1つである。しかし、大学授業の根幹である「講義」だからこそ出来る、知的好奇心の喚起、内発的動機づけの手法、情報提示装置としての黒板の重要性等々、大学の「講義」からのFDについて考える機会となった。

今回のフォーラムへの参加により、今後の「授業改善」等に関する多角的な情報提供のヒントの1つとしたい。